

# 竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（十）

—— 52蜻蛉香／54夢浮橋香 ——

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）、および同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二） 1 桐壺香／6 末摘花香」（『社会科学』第43巻第4号、二〇一四年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（三） 7 紅葉賀香から12須磨香」（『社会科学』第44巻第1号、二〇一四年五月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（四） 13 明石香／18 松風香」（『社会科学』第44巻第2号、二〇一四年八月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（五） 19 薄雲香／24 胡蝶香」（『社会科学』第44巻第3号、二〇一四年十一月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（六） 25 蛩香／30 藤袴香」（『社会科学』第44巻第4号、二〇一五年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（七） 31 真木柱香／40 御法香」（『社会科学』第45巻第1号、二〇一五年八月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（八） 41 幻香／47 総角香」（『社会科学』第45巻第3号、二〇一五年十一月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（九） 48 早蕨香／51 浮舟香」（『社会科学』第45巻第4号、二〇一六年二月）の続編

矢野環  
岩坪健  
福田智子

として、52蜻蛉香／54夢浮橋香までの三つの組香の翻刻と考察をおこなうものである。資料に関わる基本的な説明は『社会科学』第43巻第3号を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、『同』第43巻第4号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

なお、本稿をもって、一連の竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介を終える。全体のまとめについては、別稿を期す。

## 凡例

- 一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「朱」と示し、一面の終わりには、〃を付して丁数を記す。
- 一、考察には、(1) 竹幽本組香の方法、(2) 『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。(1) の冒頭には、構

造式を記す。また、解説を要する香道用語には「\*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」(『社会科学』第43巻第4号)を参照されたい。

一、巻末には影印を付す。

52 蜻蛉香

【翻刻】

△蜻蛉香

ありと見て手にはとられずみれば又

行多もしらずきえしかげろふ

一 名乗紙にて聞くべし。

一 一二三の香、各二包、客香一包、都合七包の内、六包出香

とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一 一二の香、外に拵へ試に出す。其外試なし。」七六ウ

一 一二の香、四包の内、一包除け、三の香、客香を加へ、六

包とし、打交て、一炷充焚出し、六炷終て聞に随ひ名乗紙

に左の如く名目を認出す。

一二の内一炷出たるは かげろふと書

一二の内二炷出たるは

三の香二炷出たるは

客香出たるは

(初炷を陽と書  
後炷を炎と書)

夕ぐれと書」七七オ

一の香除たるは ありと見てと書

二の香除たるは 見れば又と書

三の香二炷結ざるは中にあらず、点なし。

紙	蜻	夕	陽	蛉	かけろふ	炎
	<small>(三朱)</small>	<small>(ウ朱)</small>	<small>(一朱)</small>	<small>(三朱)</small>	<small>(二朱)</small>	<small>(一朱)</small>
乗	見れば又					
	<small>(二朱)</small>					
名	名乗					

如此認出すべし

見分のために朱字を  
書添置く也。香会には  
名目斗りを認てよし。

一 記録点屋次第」七七ウ

○(朱) 二の香の内にて出香有は

同香(朱) 両聞二点充、片聞一点充。

間違各星一つ充。是は試を聞たる故

の過怠也。

○(朱) 二の香の内にて除香有は

同香(朱) 両聞 (出香三点充  
除香一点充)

片聞一点充

○(朱) 三の香 二炷聞、各一点充。片聞、点なし。

○(朱) 客香 三点充

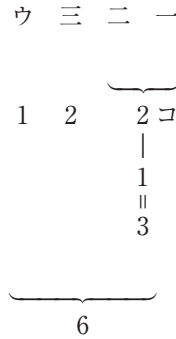
右各独聞は一点の増を加ふるべし。記録認様次に出す。」七八オ

蜻蛉香之記

〔表〕 七八ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、「一」「二」「三」(地香)の香を各二包、客香一包の計七包のうち、六包を出香する。試香は、地香の中でも「一」「二」の香のみ別途行い、「三」の香と客香には試香はない。

試香のある地香「一」「二」の四包から一包を除き、「三」の香と客香を加えて六包にし、一炷<sup>\*</sup>ずつ焚く。すべて焚き終わってから、名乗紙に、一炷目から順に聞きの名目を記す。

すなわち、「一」「二」の香は、どちらかの香が一包除かれていることから、一炷のみ出た香は「かげろふ」、二炷出た香は、初炷を「陽」、後炷を「炎」と書く。また、「三」の香は必ず二炷出るが、試香がない香であるので、初めて聞く二炷をそれと判断し、初炷を「蜻」、後炷を「蛉」と記す。客香もまた、試香がない一炷のみの香として聞き分け、「夕ぐれ」と書く。そして最後に、「一」「二」の香のうち、どちらが除かれたかにより、

「一」の香ならば「ありと見て」、「二」の香ならば「見れば又」と記す。これは、「一」「二」の香について、前述の一炷(かげろふ)と二炷(「陽」と「炎」)に区別した上で、試香のとおり両者を正しく聞き分けているかを問うものである。

記録点は、「一」「二」の香のうち、二炷出た香について、両方聞き当てた場合は各一点、計二点となり、片方だけでも一点が与えられる。だが、聞き違えれば、星一つ<sup>\*</sup>を付す。これは、試香があるのに聞き違ったことに対する罰則である。また、一炷のみの香については、まず「かげろふ」を聞き当てて三点、次に、除かれた香が「一」(ありと見て)か「二」(見れば又)かで正しく答えれば一点を得る。どちらか片方を正答した時は一点止まりである。「三」の香は、二炷とも聞き当てて各一点、計二点となる。片方だけでは点にならない。また、客香は、聞き当てると三点を得る。なお、独り聞きの場合は、以上の得点に一点ずつ加算する。

蘭之園本は、「一」「二」の香各三包(試香なし)と、「かげろふ」の香四包(試香あり)の計十包を用意し、一炷聞きにする。試香のない「一」「二」の香は、無試十炷香の要領で、最初に出た香に「ありと見て」の札を、また、もう片方の香が出たら「見れば又」の札を打ち、以後、同香には同じ札を打っていく。試香のある「かげろふ」には「かげろふ」の札を打つ。「かげろ

「ふ」を聞き違えた時のみ、星一つを付す。蘭之園本の札銘はすべて、竹幽本の聞きの名目に見え、また、試香のある香を聞き違えた場合に星を付けるなど、両者で共通した点もあるが、本香の数や答え方、組香の構成は、両者で全く異なっている。

(2) 『源氏物語』との関わり

蘭之園本の名目は「ありと見て」「見ればまた」「かげろふ」の三つで、すべて巻名歌に詠み込まれている。竹幽本は、それらに「夕暮れ」が加わる。「夕暮れ」の用例は、当該巻だけでも五例ある。「蜻蛉」は、成虫になると数時間で死ぬ。無常やはかなさの象徴である。

浮舟が失踪して入水したことを知った薫は、ある夕暮れ(⑥二七五頁)<sup>1)</sup>、蜻蛉(同頁)がはかなげに飛ぶのを見て、巻名歌(同頁)を詠んだ。蜻蛉は、薫が思いを寄せたものの、亡くなったりほかの人と結婚したりした、宇治の三姉妹(大君・中の君・浮舟)を暗示する。

### 53 手習香

【翻刻】

△手習香

身をなけしなみたの川のはやき瀬を

しがらみかけて誰かとゞめし

一 一の香三包、二の香二包、三の香三包、四の香二包、五の香三包、都合十三包の内、二包取除け、残十一包出香として、皆焚終り包紙を開くべし。

一 陽香三種<sup>五</sup>、試なし。陰香二種<sup>四</sup>、外に拵へ<sup>七九オ</sup>試に出す。

一 陽香は無試十炷香の通りに札をうつべし。上下結たるを中りとす。陰香は試の通りに札をうつべし。

一 陽香の中りは札銘を不認、左の名目を記すべし。

一 の札を 小野尼 三の札を 引板音<sup>ヒタノラト</sup>

五の札を 手習君<sup>七九ウ</sup>

一 記録点は、陽香独聞三点、二人より二点充、陰香独聞二点、

二人より一点充也。点に正傍有り<sup>札と香と同名の中を正と定。傍二点は</sup>

正一点に対す。陰香の間違は何人にも星一つ充付る也<sup>陰香</sup>

<sup>を聞た。を聞た。</sup>

一 十三包の内二包除時、もし陽香の内にて同香二炷除けば、一

包出香に残る。是を聞中たるは、手柄とする也。此点は朱

にて独聞七点、二人五点、三人より四点充<sup>ハオ</sup>かくるべ

し。

一 札数壱人前十三枚、十人分百三拾枚也。

札表

十炷香の札紋に同し。

札裏

- 一 三枚 二 二枚 三 三枚 四 二枚  
五 三枚

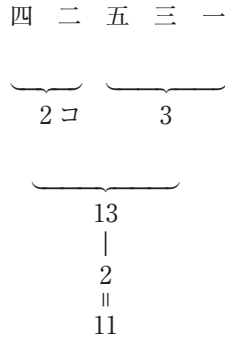
一 記録書様左に記す。」<sup>ハ〇ウ</sup>

手習香之記 五五除（朱）

〔表〕<sup>ハ一オ</sup>

【考察】

（一）竹幽本組香の方法



<sup>\*</sup>本香には、「一」の香三包、「二」「四」の香二包、「三」「五」の香三包の計十三包の中から二包を除き、残り十一包を出香とする。答えの札は、一人分十三枚を必要とする。札の表は十炷<sup>\*</sup>香札と同じでよいが、裏は、「一」「三」「五」を各三枚、「二」「四」を各二枚用意する。本香に先立ち、陰香（「二」「四」の香）には、別途、試香<sup>\*</sup>を行う。陽香（「一」「三」「五」の香）三種類には試香はない。

陽香は、無試十炷香の要領で札を打つ<sup>\*</sup>。すなわち、聞いたこ

とのない香は三種類出てくるはずなので、それらが最初に出た時、順に「一」「三」「五」の札を打ち、その後は同香<sup>\*</sup>に同じ札を打っていく。一方、陰香は試香の通りに打てばよい。

本香をすべて焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。陽香を聞き当てた時には、「二」「三」「五」の札銘ではなく、順に「小野尼」「引板音」「手習君」という聞き<sup>\*</sup>の名目を記す（ただし、「香之記」には、すべての陽香を名目で記している）。陰香は、聞き当てたか否かに関わらず、札銘をそのまま書く。

記録点について、陽香の独り聞きは三点、二人からは二点に對し、陰香の独り聞きは二点、二人からは一点である。また、陰香を聞き違えた場合は、星<sup>\*</sup>を一つ付す。陰香は試香があるため、聞き当てても得点は低く、聞き違えれば減点される。

また、香席の冒頭で十三包から除かれた二包が、陽香の同香二包であった場合は、残り一包が出香されることになる。陽香には試香がなく、この一炷<sup>\*</sup>を聞き当てるのは難しい。そこで、この一炷を聞き当てると、その功績として、独り聞き七点、二人からは五点、三人からは四点が与えられ、記録には朱で記す。また、陽香は、同香が二炷あるいは三炷出た時には、無試十炷香のごとく、同香を二炷以上聞き当てた時にのみ点が得られる。

なお、竹幽本は、記録点について、点には「正傍」があり、札と香とを同名で聞き当てれば「正」、異名なら「傍」と説明して

いる。「傍」二点で「正」一点に等しいというから、その差は大  
さい。そして、陽香を無試十炷香として札を打てば、実質上、香  
を聞き当てたとしても、点が「正」か「傍」かは、出香の順序  
による全くの偶然に左右されるということになる。あるいは、同  
香すべてを聞き当てれば「正」、同香の部分当たりを「傍」とす  
べきところか。

蘭之園本は、「一」「二」の香各五包（試香あり）と客香「手  
習」の香一包（試香なし）の全十一包を用意する。そして、「一」  
の香三包、「二」の香二包の計五包と、その残りの五包の二つに  
分け、そのどちらか一方に「手習」の香を交せて六包とし、さ  
らに二包ずつ三組を作って二炷聞きにする。竹幽本と比較する  
と簡便な構成である。ただし、蘭之園本が用いる五つの聞きの名  
目のうち、「引板の音」「手習の君」は竹幽本にも見えるが、「小  
野」（竹幽本では「小野尼」）「山里」「軒の紅梅」はない。竹  
幽本は、名目よりもむしろ、陰陽に分けた香によって、物語の  
男女関係を象徴的に示そうとしたものと見られる。

## (2) 『源氏物語』との関わり

前述のように、蘭之園本の五つの名目のうち、竹幽本にない  
のは、「山里」と「軒の紅梅」である。前者は、『源氏物語』当  
該巻に十一例見える語だが、後者は、『源氏物語』『源氏小鏡』<sup>2</sup>と  
もに見られる「閨のつま近き紅梅」（⑥三五六頁）に拠ると考え

られる。

失踪した浮舟は意識不明になったが、たまたま通りかかった  
尼君たちに助けられ、比叡山の麓、小野に引き取られる。娘を  
亡くした尼君は、浮舟を娘の生まれ変わりだと思い、介抱する。  
快復した浮舟は手習（⑥三五五頁など）に精を出す。これによ  
り浮舟は、手習の君と呼ばれるようになる。やがて浮舟は念願  
だった出家を果たし、勤行の合間にも手習に励んだ。秋になる  
と小野でも稲刈りが始まり、「引板ひき鳴らす音」（⑥三〇一頁）  
が聞こえた。

## 54 夢浮橋香

### 【翻刻】

△夢浮橋香

法のしと尋ぬる道をしるべにて

思はぬ山にふみまどふかな

一 試なし。

一 十炷香の札を用。

一 法の師の香、尋ぬる道の香、思わぬ山の香、踏まどふの香、  
各二包充、夢浮橋の香一包客香、都合九包出香とし、「ハ一ウ九

炷皆焚終りて包紙を開くべし。

一 五種の香包分様

法の師香 一包 尋ぬる道香 二包

右三包は青紙の香包を用

法の師香 一包 思わぬ山香 一包 踏まどふ香

一包

右三包は黄紙の香包を用

思わぬ山香 一包 踏まどふ香 一包 夢浮橋香

一包」八三オ

右三包は赤紙の香包を用

一 出香九包打交て、其内より青紙包の三炷を焚出して、札筒

を廻す。三炷の内、一炷有香は、何番目と聞て、其香に合

て札をうつ（飯合一炷ある香、二番目に出たるは、二の札うつへし、皆是に準へ。）扱又黄紙包の三炷を焚出し

て、折居を廻すと、初三炷の内に出たる香、何番目に有と

聞て、其香に合て札をうつ。又赤紙包の三炷を焚出して、札

に盆を廻すと、青黄包の内にて聞ざる香」ハニ何番目に出

たると思は、其香の札をうつ也。是は夢浮橋香なる故に専

一に聞べし。三炷間、三次終て記録に記し、香包紙を一同

に開て点を定る也。

一 記録には、番付の札名斗り認め、其余は明置く也。香本に

は、出香の通り認てよし。点は、法の師独聞二点、二人よ

り一点充、二炷ともに聞は二炷目は一点増をかくるべし。夢

浮橋独聞五点、二人より四点充也。猶、記録認様次に顕す。」

八三オ

夢浮橋香記

〔表〕 八三ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

	包	青	黄	赤
法の師		1	1	
尋ぬる道		2		
思はぬ山		1	1	1
踏まどふ		1	1	1
夢浮橋	1			
	初	中	後	
	1	1	1	9

『源氏物語』に依拠する組香では、一般に、最終帖「夢浮橋」を欠く。蘭之園本にも見られない。その点で、「夢浮橋香」を有する竹幽本は、きわめて珍しい伝書と位置付けられよう。

\* 本香には、「法の師」「尋ぬる道」「思はぬ山」「踏まどふ」の香、各二包と、客香「夢浮橋」の香、一包の計九包を出香する。すべての香に試香はない。答えには、十炷香札を用いる。

本組香は、初段・中段・後段に分かれる。

初段は、「法の師」の香を一包と「尋ぬる道」の香二包の全三

包を青紙の香包にして用意する。三炷のうち、一炷ある「法の師」の香が何炷目に出たかで、「一」「二」「三」のいずれかの札を、廻ってきた札筒に打つ\*。

中段は、「法の師」「思はぬ山」「踏まどふ」の香、各一包全三包を黄紙の香包にして用意する。三炷のうち、初炷に出た香（「法の師」の香）が何炷目に出たかで、初段と同様に札を打つ。中段では、折居を廻す\*。

後段は、「思はぬ山」「踏まどふ」「夢浮橋」の香、各一包全三包を赤紙の香包にして用意する。初段・中段で出なかった香を聞き当てる。すなわち、中段で「思はぬ山」「踏まどふ」の香はすでに出ているため、「夢浮橋」の香が何炷目に出たかを答える。ここでは盆を廻して札を打つ。

以上のとおり、三炷聞きを三度行い、九炷すべてを焚き終えたら、答えの札を記録して、包紙を開き正答を披露し採点する。記録には、初段・中段は「法の師」の香、後段は「夢浮橋」の香が何炷目に出たかのみを、札名「一」「二」「三」で記し、その他の部分は空欄のままにする。もともと、「香本」（ここでは「香之記」の表題の次、「本」と記された行を指す。）には、出香の順序通りに香名を記してよい。

記録点は、「法の師」の香について、独り聞きは二点、二人からは一点である。また、初段・中段の二炷をともに聞き当てた

時は、二炷目に一点を追加する。「夢浮橋」の香では、独り聞きは五点、二人からは四点である。「法の師」に導かれながら「夢浮橋」にたどり付くという趣向が見て取れる。

(2) 『源氏物語』との関わり

竹幽本の五つの名目は、「夢浮橋」が巻名、「法の師」「尋ぬる道」「思はぬ山」「踏み惑ふ」は巻名歌に拠る。このうち「法の師」とは、浮舟を出家させた僧侶を指す。薫はこの僧侶から浮舟が生きていることを聞き、浮舟に宛てて送った手紙に、「仏の教えを聞きに僧侶を訪ねてきたのに、浮舟の消息を聞かされ、思いがけず恋の山に踏み迷ってしまった」という意の巻名歌を書き添えた。しかしながら、仏門に入った浮舟は手紙を受け取らず、薫にも会おうとしない。

薫と浮舟との再会がないまま、『源氏物語』は幕を閉じる。巻名になった「夢浮橋」という語は、『源氏物語』には見られないが、薄雲の巻で光源氏が口ずさんだ古歌に酷似した表現を見出す。

世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡りつつ物をこそ思へ  
(②四四〇頁)

#### 附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベース」の構築と平安朝



文学の伝承と受容に関する研究」(同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号253330403、いずれも平成25〜27年度)における研究の一部である。

注

(1) 以下、本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①〜⑥(小学館、一九九四〜一九九八年)により、その巻数と頁数を( )を付して示す。なお、本文には、適宜手を加えた箇所がある。また、名目と一致する本文には傍線を付した。

(2) 『源氏小鏡』の本文は、岩坪健『源氏小鏡』諸本集成(和泉書院、二〇〇五年)所収の第一系統第一類本による。



	名糸	名糸	名糸	名糸	名糸	木	
	蛸	陽	陽	蛸	蛸	之	
月	糸	糸	糸	糸	糸	ウ	
	陽	蛸	蛸	陽	陽	一	
	蛸	蛸	蛸	蛸	蛸	之	
	糸	糸	糸	糸	糸	二	
	糸	糸	糸	糸	糸	一	
	糸	糸	糸	糸	糸	除	三
	星二	星一	星一	星一	星二	之	二

情 吟 香 之 記

○ 一の香 二瓶國香之糸先所中分

○ 客香 之糸先

右名種少一糸の流ど如く糸流認極少出

○ 一の香の同く生香有

同香 兩少之糸先 國遠香星之糸先也試之

○ 一の香の同く際香有

同香 兩少之糸先 國遠香星之糸先也試之

(七十八丁裏)

(七十八丁表)

之 習 香

此香かけかき流の糸先濃で  
 一 一の香之也二の香二色之の香三色四の香二色之香  
 之也別合十二色の内二色也際香残十二色出香  
 皆替紙之也紙で開く

一 陽香二種一試之 陰香二種二外一極  
 試之出

一 陽香の試十般香を通す小札とす川也とす  
 結とす中とす陰香と試の通す小札とす川  
 香

一 陽香の中とす札流とす認尤の名目と糸  
 一の札と 小神尼 之の札と 汁板音  
 五の札と 之習香

(七十九丁裏)

(七十九丁表)

一 祀 龍 香 陽 香 独 國 之 三 人 三 点 元 陸 香 独 國  
 二 点 二 人 一 点 元 三 点 正 傍 有 札 香 同 名  
 札 香 香 里 名 傍 二 点 正 三 点 對 陸 香 的 國 遠 六  
 の 中 之 傍 之 遠 傍 二 点 正 三 点 對 陸 香 の 國 遠 六  
 何 人 之 香 星 一 点 牙 也 法 香 試 之  
 一 十 二 色 の 内 二 色 陸 附 陽 香 の 内 之 同 香 二 枝 陸 香  
 一 色 出 香 亦 抄 之 是 國 中 之 香 一 枝 抄 之 也  
 一 時 之 香 亦 之 独 國 七 点 二 八 五 点 二 八 一 九 一 四 五 点 元

抄 之

一 札 數 人 第 十 三 枝 十 八 分 而 籍 枝 之

札 表

十 版 香 の 札 紋 亦 因 一

札 表

一 之 枝 二 之 枝 三 之 枝 四 之 枝 五 之 枝

一 祀 龍 香 札 左 亦 龍 氏

(八十一丁裏)

(八十一丁裏)

(八十一丁表)

習 香 之 祀 五 九 除

本	三	一	四	二	五	二	一	四	三	一	三
若 松	卷	四	四	二	卷	二	卷	四	卷	卷	卷
玉 椿	二	卷	四	卷	卷	卷	卷	二	卷	卷	卷
花 菱	卷	四	二	卷	卷	二	卷	四	卷	卷	卷
苗 菊	四	二	卷	四	卷	二	卷	卷	二	卷	卷
木 蘭	二	卷	卷	二	卷	四	卷	四	卷	卷	卷

辛 巳 月 日

後 浮 橋 香

法 の 志 と 為 ぬ 道 と 三 づ へ ち

思 へ ぬ 山 亦 如 々 々 々 一 札

一 試 分 一

一 十 版 香 の 札 之 用

一 法 の 師 之 香 亦 如 々 々 々 香 思 へ ぬ 山 亦 如 々 々 一 札

香 二 色 元 後 浮 橋 香 一 色 紀 香 亦 合 九 色 出 香 一

(八十二丁裏)

(八十二丁裏)

(八十二丁表)



